北辰 TOKYO

岐阜県立多治見北高等学校同窓会
東京支部会報　第18号
2004年９月26日

同窓会活動を通し同窓生の絆を深め、ネットワークを広げよう!!

多治見北高等学校同窓会・東京支部
会長　愛知 紘治（１回生）

今年の夏は近年にない猛暑。東京地方も気象台観測史上最高の39.5度を記録、東京の真夏日が40日も続き、熱中症患者が続出するという猛烈に暑い夏でした。会員の皆様は如何お過ごしでしたでしょうか？　お元気にお過ごしのこととお喜び申し上げます。日頃、会員の皆様には東京支部の同窓会活動にご協力・ご支援を頂き感謝申し上げます。

今年は母校創立45周年を迎え、本部同窓会45周年総会が３月21日多治見市セラミックパーク・ミノで開催されました。その席上、下畑校長先生から母校校舎の老朽化に伴う改築計画が順調に進んでいると話されました。また、在校生も本校の教育指針である“自主、自律、自学”を胸に学業に励み、学業成績も優秀、今年センター試験の平均点は岐阜高校に次ぐ成績、難関大学への受験成績も良く、県下でもトップクラスの素晴らしい学校であり、より一層の発展の為にハード、ソフトの両面から学業環境を整備して行きたいと話されました。

同窓会も４年前から母校の「総合学習カリキュラム」に、講師として卒業生を派遣してほしいとの母校の要請に応え、実社会で活躍している卒業生を派遣、実社会での仕事と経験を話し後輩の社会勉強に役立ち好評であると聞いております。今年も東京支部から昨年まで片山虎之助総務大臣の秘書官を勤めた自治省勤務 杉本達治君（21回生 現福井県総務部長）が秘書官の仕事と今まで取り組んできた行政官の仕事など話してくれました。この講演内容は本会報に収載されていますので参照ください。年々、これらの同窓会活動を通し母校と卒業生との絆が深まって来ています。同窓会活動をより活発にして、母校―本部・支部同窓会の連携を深め、この流れを大切に広く深くして行きたいものと考えております。

東京支部は今年も活動方針として母校及び本部同窓会との連携を掲げ、母校・本部同窓会活動に積極的に協力しております。また、昨年に引き続き東京支部同窓会の活性化を図るため、東京周辺在住の同窓生のネットワークを広げようと、神奈川、埼玉、千葉、東京の地域交流会立上げに努めております。横浜では既に４年ほど前に、埼玉は今年６月立ち上げました。横浜、埼玉地域交流会はまだ10数名の少人数の集まりですが毎回同窓生ならではの楽しい集いとなっております。今年度中には千葉でも地域交流会を立ち上げる計画です。世間は広いようで狭いもの、思いがけない先輩・後輩、同期生が身近にいます。皆さん！　北高同窓生のネットワークを広げましょう!!　横浜、埼玉、千葉の地域交流会幹事から声がかかったら是非顔を出して見てください。また、声がかからなくとも面白そうだから出席してみようと思われる方は東京支部役員に連絡して下さい。

さて、今年も恒例の東京支部総会を11月13日（土）新宿モノリス29にて開催します。今年の幹事は５回生、15回生、25回生。幹事の皆さんが従来と違った新しい趣向の総会・懇親会を企画しております。若い同窓生の皆さんも奮って参加して下さい。楽しい総会・懇親会となるよう期待しております。それでは東京支部会員のみなさん！　総会で会いましょう!!

創立50周年に向けてさらなる充実を

多治見北高等学校同窓会会長　尾関 恵一（２回生）

多治見北高同窓会東京支部の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

私が、この春の45周年総会において、同窓会長の重責を負うこととなりました。私は、今まで副会長として、東京支部の総会には毎年ご招待をいただいていましたので、東京支部の皆様にはご存知の方も多いものと思います。東京支部では2回生の皆様もご活躍中で、総会に出席するたびに、2回生の皆様とお会いできるのも楽しみの一つでありました。また、東京支部の総会は、毎年2名の講師による講演があり、とてもためになるものであり、アットホームな感じを受けるものでもあり、いい感じで支部が運営されていることをうかがい知ることのできるものであります。今後も是非、支部の総会には出席させていただきたいものと考えています。

私は、今後の5年間も若尾会長時代の方針を踏襲していきたいと考えています。つまり、組織の確立とその充実に向けて、会報「北辰」の発行、北高同窓会のホームページの開設、各学年の役員名簿の作成、会員名簿の充実、またゴルフコンペの開催などを継続していきたいと考えています。

このような活動を継続するために、財務問題が解決しなければならない極めて重要な問題です。この解決のためには、新入会員の入会金の値上げや永久会員制の導入など、財務基盤の確立のためにさらなる検討をする必要があります。

そして、私の任期の終える時には50周年を迎えることになります。50周年はわが同窓会にとっては極めて大切な記念すべき年でありますので、この50周年行事をどのようにするかを検討する50周年記念事業委員会を発足させました。全会員のご意見・アイデアをうかがいながら計画をすすめていきたいと考えています。

来るべき50周年に向けて決意を新たに活動を開始しました。

東京支部の皆様の絶大なご支援・ご協力をお願い致します。

温暖化と空調

岐阜県立多治見北高等学校
校長　下畑　五夫

「受験勉強は自己との戦い、そして北高では夏の暑さとの戦いでした。」３月卒業式、答辞で生徒が述べました。寒い体育館でしたが、思わず納得しました。

そして、今年の夏。今までの所文字通り猛暑です。日本一暑い多治見を満喫（？）しています。昨年は、寒冷地飛騨から、日本一暑い多治見に赴任ということでかなり構えてきたのですが「何だ、多治見の暑さも大したこと無いではないか」と思っていました。冷夏のせいでした。ところが、一転今年は猛暑。さらにあろうことか６月21日には、大型で強い台風６号が四国に上陸し、多治見地区には８時２６分暴風雨警報発令。それでSHR後、生徒は帰宅。そして、間の悪いことにこの日は北海道への修学旅行前日にあたっていたのです。日本海を抜けて北海道で温帯低気圧になるまで、飛行機が飛ぶのか飛ばないのかでやきもき。もし、欠航となれば修学旅行は中止になってしまいます。台風に翻弄され、出発前からクタクタという状態でした。しかし、天に味方され全行程（札幌・小樽・ニセコ・登別など）を支障なく旅ができ、有意義な修学旅行となりました。もっとも台風が持ってきた熱帯気団の名残で６月の北海道としては気温が高かったのですが・・・・。早い台風も地球温暖化のためか？

先輩方も暑さに耐え、忍耐力を培われたきました。その伝統？を継続せねばと昨年のうちは考えていました。しかし、北高の夏は暑く生徒の弁当が昼までに腐敗するという噂が立つほど。そこへもってきて昨年から学校ごとで条件が整えば空調設備の設置がOKになったこと、加えて何となく猛暑が予感され、昨年末、PTA会長に空調設置の方向で検討をお願いをしました。年度末でかなりのハードスケジュールでしたが、景山龍夫会長、加藤文雄（４月より横井麻男氏）空調基金委員長（現PTA会長）を初めとして役員あるいは会員の方々の献身的な御努力により、なんとか６月末、北舎の24教室および中舎視聴覚教室に空調設備が完成しました。

この空調設置にあたり同窓会からも多額の御援助をいただきました。本当にありがとうございました。適切な温度管理を心がけ、快適な勉学環境で生徒一人一人が各自の目標達成にむけて一層の努力をしてくれるものと期待しています。ただし、空調利用によって環境に一層の負荷を掛けることは事実です。このことを一人一人がしっかりと自覚し、様々な場面で環境負荷をできる限り少なくするよう地道な努力を始めて欲しいと願っています。

母校、球技大会のようす

私の北高入学百日余り

岐阜県立多治見北高等学校
一年生 中川 真理子

今、これを書いているのは夏休み直前です。ということは、高校に入ってからの経験は３ヶ月以上あるわけなのですが、私の中では未だ５月気分です。本当にあっという間、でした。今までに感じたことのない速さで時が経つことに、私は大変驚いています。このままあっという間に１年が過ぎていってしまうのか、と少し不安もよぎります。

私はこの多治見北高校にとても憧れていました。私の姉が卒業生だったこともあり、姉の楽しそうな姿を見ていたので、私もこの高校に行きたい、と思いました。しかし私は苦手教科があり、合格できるか、受験当日まで心配でしたが、努力が報われ見事合格でき、心の底から合格の喜びをかみしめました。そして、同時に、高校生になったら勉強をしっかりやる！と決意していました。

いざ北高生になってみると、あまりの中学との差に驚きを隠せませんでした。進度は速く、宿題はもちろん、予習は当たり前の世界でした。４、５月はまだ、中学の生活が抜けきっておらず、山のような課題に毎日悪戦苦闘していました。受験の時よりも勉強しているといっても過言ではありません。取り掛かる時間が遅ければ、終わる時間もその分遅くなり、朝起きるのがとてもつらかったです。６月に入って、初めてのテストがあり、「これくらいなら何とかやっていける」と思ったのが間違いでした。それから少しだらけた私は、家に帰ってもすぐに宿題をやらずにそのまま寝て、朝急いでやる、という風になってしまいました。当然成績が上がるわけもなく、テストも良くはなかったので、もう一度、原点に帰ろうと思いました。

今は何とかリズムを作り、「校訓」をいつも意識しながら毎日を過ごしています。勉強が大変で、友達に泣きついた日もしばしばありましたが、つらいことだけでなく、楽しいこともたくさんありました。行事をやっていくにつれ、北高のことや、先生、周りの子を少しずつ知っていける嬉しさは計り知れません。

北高にきて思ったのは、ただ毎日勉強していくだけでは今までと変わらない、ということです。今やっていることを、何も思わずひたすらやるのではなく、「意味を考えてやること」が大切なんだと思います。北高は勉強、勉強と思っていたけれど、そこに意味があると気づけば、少し違ってくると思ったのです。

今私は、北高に入学できて良かったと改めて思っています。これからの毎日も、後から思うときっととても速く感じると思います。でも、それを無駄なものにするか、素敵なものにするかは、自分以外では決めることはできません。何事も自分から変わらないことには何も変わらない、ということをしみじみ思った百日余でした。

多治見北祭典考

岐阜県立多治見北高等学校　楓 泰宏

全くの私感であるが、アテネ五輪の開会式で印象に残ったことは、エーゲ海を模して創られた競技場内プールに浮かび上がる炎の五輪ロゴでも、巧みに作られた聖火台への点火シーンでもなく、イラク選手団の入場に注がれた大きな拍手であり、その後に入場したアメリカ大選手団に対するさらに大きな歓声であった。スポーツに国境はないのだが、華やかな開会式が開かれている一方で聖地ナジャフでの戦闘は激しさを増している現実に皮肉めいたものを感じる今年のスポーツの祭典である。

「祭典」と言えば、北高においては「北辰祭」である。文化の祭典２日間とスポーツの祭典１日の計３日間を学校祭と位置づけ、その間は学校という敷地内に繰り広げられる非日常空間を思い残すことなく謳歌する、というコンセプトは本校創立以来脈々と受け継がれている。学校祭や予餞会といった学校行事を縮小する全国的な傾向にある中、本校における北辰祭の位置づけは明確であ

り、縮小どころかますます隆盛を極めようとしている。

さて、この「祭典」も最近はかなり様変わりしてきた。出し物といえば、私が在学していた20年程前は有志によるバンドが大流行りであった。長髪にギターというのが当時のある種のステイタスであった。クラスの出し物も時代とともに変化していくが、最近は「クラス全員で踊るダンスや大道芸」というものが大流行である。「当日参加できて、お祭り気分に浸れるもの」「クラス全員でできるもの」という所が受けている原因の一つだ。そのため文化祭当日はあちこちでダンスの集団あり、大道芸の集団あり、太鼓の集団ありで、それぞれに人だかりができて、一般公開日には県下でも１、２を争うほどの華やかさを誇るほどのにぎやかさである。新入生などは「北高ってすごい！」と実感するひと時であろう。一方、「展示もの」は全く人気がない。世の中で起こっていることを調べて発表したり、社会に訴えかけるものを追求したテーマを持つものは皆無である。かつて化石山の中国人労働者の問題を歴史的観点から調べたり、難民救済キャンペーンといった、ある意味で「北高ならでは」の発表のレベルの高さに他校から見て舌を巻いた記憶があるが、そういった気配は現在の文化祭にはない。今の時代こそ「社会」に目を向ける必要がある時期であるはずなのに、こうした発表が文化祭から失われているのは世相の反映と言えるのかもしれない。

20年前にも、私が赴任した10年前にもクラスの中にはサボろうとする生徒が決まって何人かはいたものである。これはどの学校にも見られる現象であった。しかし、ここ２、３年、そうした生徒は本校ではめっきり少なくなった。先日も夏休み中に部活動の指導に行くと、部員がほんの数名しか来ていない。どうしたのかと聞くと「クラス活動」に行っていると言う。以前はクラスよりも部活動を優先する生徒が多かったのに今ではそれが逆転している。体育祭の軍団の応援練習もそうである。以前は何十人もの生徒が暑い応援練習を避けて無断で脱走したりしていたものである。けれども最近はそういった生徒は殆ど見られなくなった。一方、クラスのリーダーになったり、応援団員になろうとする生徒がめっきり減った。クラスから応援団員を選出するのに担任はひと苦労であり、応援団長を選出するのに生徒会顧問は頭を抱える。これは生徒会役員募集の際にも起こる。最近の生徒は「皆で一緒に」「団結して」「同じ汗を流し」「同じ感動を分かち合いたい」傾向が強いようである。一方、自分がリーダーとなり他を引っ張る、といったことは疎んじられる。決して冷めている訳ではなく、むしろ行事を成功させようとする気持ちは強い。かといって自分がその中心になる必要はないのである。生徒の中では「集団」というものが最優先され、自分だけ集団から漏れることを極端に嫌うのである。生徒の中に潜む一種の寂寥感、言い換えれば「孤独を嫌う」「つながりを求める」気持ちがそういった現象に現れているのではないかと思えなくもない。

とにかく今年も北高の「熱い」季節がやってきた。今年の北辰祭も盛り上がることであろう。ただ忘れてはならないのは、北高生は自分の学校に誇りを感じ、北辰祭を盛り上げようとする気持ちを今も昔も持っているということである。そしてそういった心意気を教師側がスポイルすることなく、うまく引き出しているのも現在の北辰祭が隆盛を極める一因ともなっているのである。

（注：楓先生は英語担当で、今春からは岐阜大学大学院教育研究科で研修されています。）

いきいき暮らせる街づくりめざして

多治見市長　西寺雅也（2回生）

多治見市は「日本一暑いまち」といわれ、すっかり有名になりましたが、そればかりではなく、最近多治見市はいろいろなことで、みんなが頑張り始め、徐々に全国に名を知られるようになってきました。少し自慢話になりますが、一つは全国の環境NPO主催の「環境首都コンテスト」で遂に日本一になりました。市が施策に対する環境配慮のシステムを開発したこと、地域におけるビオトープづくりや施設建設・運営への「市民参加」が徹底していることなどが評価されました。5月飯田市で行われた「環境自治体会議」のパネルディスカッションで一緒にパネリストをつとめた田中長野県知事に「Spa」誌上で紹介され、長野県職員が多治見市に研修に来ることになりました。

もう一つ、関西社会経済研究所（所長本間正明阪大教授）が行った10万以上の都市を対象とした「自己評価に基づく自治体の組織運営評価ランキング」全国５位にランクされました。上位４位までがいずれも人口50万人以上の市・区で中小都市の中では断然１位の成績でした。読売新聞の記者が東京からやってきて、「どうして多治見が5位なんですか？」と怪訝な顔で取材をしていきました。後日「Yomiuri Weekly」（８月８日号）で多治見市の取り組みを紹介してくれました。

最近、多治見市を訪れる観光客も着実に増えています。まちがだんだんきれいになっていくとほめられます。「オリベストリート構想」というビジターズ産業（産業観光）興しに取り組んで、すでに7、8年が経ちますが、ようやく実を結び始めています。もう一息という感は否めませんが、落ち着いた街並みが復活しつつあります。なによりも心強いのはそれぞれの地域がとても元気に動き始めたことです。

とはいっても、地場産業の状況は厳しく、人口の停滞と高齢化は将来の多治見市にとって、無視できない課題を投げかけています。今、こうした中でも元気を失わず、市民がいきいきと暮らしていくことのできるまちづくりをめざして、「持続可能な地域社会づくり」のための政策研究に取り掛かっています。

一方、市町村合併については「東濃西部３市１町」は意向調査の結果、市部いずれも反対が多数を占め白紙に。改めて多治見・笠原の合併は成功させようと取り組みを始めています。

なお、４月に「多治見市の総合計画に基づく政策実行」（公人の友社）というブックレットを出版しました。機会があれば、ご一読を。

同窓生便り

戦略・産業調査

可児 勝（1回生）

昭和36年多治見北高卒、三菱化学勤務は37年超となった。

現在、三菱化学グループ会社である（株）ダイヤリサーチマーテックに勤務している。三菱化学グループで調査コンサルティングを担当する会社、いわゆるシンクタンクである。石油化学産業調査を担当。石油化学を中心として石油・天然ガスから特殊化学品・工業化学品・プラスチックス、それらのユーザー産業である樹脂加工業、ゴム・ラバー産業、化学繊維産業、自動車産業、電子・電気産業、住宅産業も調査対象に捉える。対象地域は、アジアを中心とするが、私の英国駐在８年（全欧州担当）の経験から欧米へも広げて全世界とした。顧客対象も三菱化学社内外、国内外等全世界である。

産業調査であったが、私が責任者となってから戦略・産業調査とした。つまり、化学市場、化学産業の動向を調査するだけではない。顧客が化学企業であれば、事業戦略、企業戦略を提案する。顧客が官公庁であれば、政策提案に踏み込むこととした。戦略・産業調査である。調査コンサルティング分野で重要なことは、広く、深く調査し、高度な解析を行い、将来予測、具体的提言をすることである。しかもその価値を顧客に認識していただく必要がある。かかる戦略・産業調査が充実したものであることは当然であるが、それだけでは、顧客にその価値を認識頂いたことにはならない。たとえば、世界的大手化学会社の社長が公式に述べた言葉（将来予測、提言）がある。その将来予測、提言は、実現しうる巨大組織を持ち、偉大な迫力と重みがある。そこまでは、いかなくとも世界的大手コンサルタント会社の将来予測、提言は、ネーム・バリューを背景に大きな影響力を有する。

それら競合他社に勝ち抜くためにはどうしたらよいか。つまり、

ネーム・バリューを付けるためにどうするか。答えは、専門誌での執筆、国際会議や国内会議での講演、報告書の刊行・発売（日本語版、英語版）等で“専門家に尊敬される専門家”になることであろう。これらを遂行する人がいなければ、私がやらざるを得ない。シンガポール、バンコク、ジャカルタ、クアラルンプール、上海、台北、東京における国際会議で講演してきた。中国の専門家が集まる中国、上海の国際会議で、中国の石油化学産業について講演した。つまり、その産業の本場で、その産業を論じたのである。世界の、また、本場の“プロを教えるプロ”になった瞬間であった。

社内では、“アジアにおける石油化学産業調査で世界NO.1を目指し、実現する“との目標を掲げて部局を引っ張ってきた。その後、上述のような上海、国際会議の講演は４回になった。海外の講演計12回、日本の講演計７回となった。上記報告書（日本語版、英語版）は、日本の大手化学企業だけではなく、世界の大手化学企業、BASF, Dow, Shell ,BP, ExxonMobil, Bayer, Akzo Nobel, Celanese, DSM, Sinopec, Reliance, Sabic,等が夫々の報告書を１冊だけではなく何冊も購入してくれた。特に、中国石化の報告書を中国最大の石油・化学会社 Sinopec が購入してくれた意義は大きい。中国のある案件では、世界コンペにうち勝ち、調査コンサルティング業務を受注した。

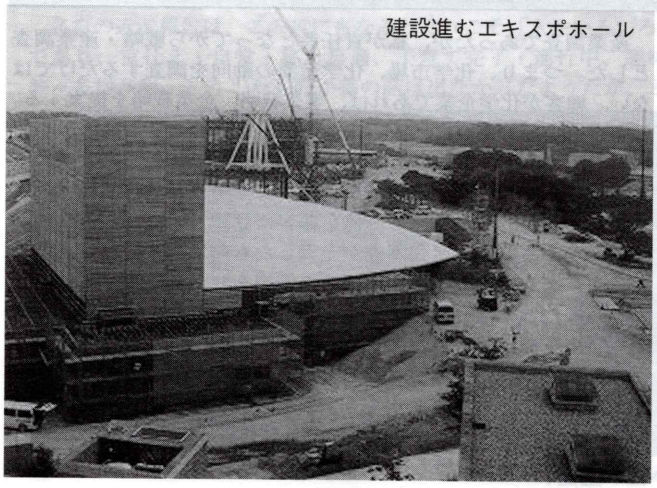
今後は、“中国だけではなくアジア全域における石油化学産業調査で世界NO.1を実現する”ことである。戦略・産業調査のかかる目標を実現すべく邁進して行きたい。

愛知万博とペ・ヨンジュンさんのお話

愛・地球博2005 海外PR協会役員 **坂本 浩一**（18回生）

韓国政府が今年７月16日に、駐名古屋韓国総領事館で会見を開き、愛・地球博（愛知万博）にドラマ「冬のソナタ」に出演しているペ・ヨンジュンさんが来日され特別公演が行なわれる事を正式に発表しました。韓国出身の人気女性歌手BOAさんも一緒に来場される予定です。実は、そのペ・ヨンジュンさんの来日に大きな役割を果たしたのが、私が広報委員として活動している「愛・地球博海外PR協会」であることをご存知の方は少ないと思います。

今回の直接の契機となったのは、今年５月10日にPR協会の川上会長（愛知県長久手町議会議員）が駐名古屋韓国総領事館の総領事である柳　洲烈（ユ・ジュヨル）さんに会見でお渡しされたペ・ヨンジュンさん招聘趣旨文（原文は韓国語）です。内容を抜粋してみました。『…特に韓国、中国をはじめとするアジア圏の国々の方達との交流は、今後の日本の状況を考えた上でもとても重要になると思います。現在、日本では過去にないほどの韓国ブームで、その牽引役となっているのが、ドラマ「冬のソナタ」に出演し来日もされた俳優のペ・ヨンジュンさんでしょう。ペ・ヨンジュンさんの絶大なる人気をお借りできれば、万博のPRは大変意義のあるものになるでしょう。ペ・ヨンジュンさんが我々の想いをご理解いただき、ご協力いただけることを心よりお願い申しあげます…』この想いがペ・ヨンジュンさんご本人に実際に届いて今回の愛知万博での来日が正式決定されたことを心より喜んでおります。


建設進むエキスポホール

最後に、愛知万博を一言で言うと「いかなる観点から判断してもとても素晴らしくて筆舌に尽くしがたし」となります。あの壮大なスケールのパビリオンやイベントをじっくりと見るには10日間ぐらいはかかるのではないでしょうか。その為、私たち家族は、前売り券ではなく会期中の通し券（大人約18,000円）を買って何度も繰り返し見に行く予定です。世界の平和と幸福を希求する人々にとって愛知万博が21世紀の本当の意味での地球大交流の場となることを願うと共に皆様と愛知万博の会場でお会いできる日を今からとても楽しみにしております。

母校での講演と豪雨災害・原発事故による経験

福井県総務部長 **杉本 達治**（21回生）

７月16日、私は多治見北高で講演をするために、久しぶりに母校を訪れました。今年の３月、渉外部の渡辺正司先生、加藤妙子先生から依頼をいただき、母校の教壇に立てることを大変光栄に思って、二つ返事でお受けしたものです。二十数年ぶりの母校は本当に懐かしく、先生方とお話をしていると当時の記憶がすぐに蘇ってきます。私が入学した昭和53年は、北舎を建設しながら木造校舎が半分だけ残されている時期で、一年間廊下を歩けば床がきしむような教室で授業を受けていました。今では、本館の前に立派な体育館ができ、その本館も来年度には新校舎建設のために取り壊しを行うとのことで、次第に立派になる母校に喜びを感じるとともに、当時の思い出が失われていくようで、少し寂しさも覚えました。ただ、生徒達とお話をしていると、当時と変わらぬ自由な校風の中で伸び伸びと生活している様子で心強く思いました。

講演は、夏休み直前の放課後の時間を使って行われました。相手は１年生から３年生の希望者約40名。中には平成元年生まれの生徒もいて、昭和61年には役所に入って仕事をしていた私は『歳をとったんだなぁ』と率直に感じました。

私からは、

○高校１年生の３月（２年生の前期）に生徒会長になって北辰祭の成功を目指して頑張ったこと。 ○進学の際、成績が思わしくない中で、志望校については妥協することなく、浪人しながらも大学合格を勝ち取ったことが、その後の人生でも自信につながっていること。 ○自分に合った就職先を見つけるポイント。○今、自分が目指している行政の姿。

といった自らの経験談を話したあと、

○多治見北高の『自主・自律・自学』の精神は、地方分権の基本である『自己決定、自己責任』や経済界でよく使われるグローバルスタンダードの基本にも相通じていること。 ○受験勉強の時代まではともかく、大学に入ったらマニュアル人間にはならず、自らの創意と努力で問題解決することを心掛けること。 ○これからの時代は個性的な人材が求められているので、自分の得意分野を徹底的に伸ばし、その道のプロを目指すこと。 ○大学受験において、北高生は伝統的に現役合格が多いが、これは浪人してでも上を目指すという気概が欠けていることの表れでもある。理想を高く持ち、自分の目標のために決断をすることも大切なのではないか。そして、退路を断って全力で臨めば道も開ける。

といったことをお話ししました。

猛暑の中、長時間にわたる講演でしたが、生徒たちは熱心に私の話に耳を傾けてくれ、大変嬉しく思いました。

もう一つ、私は最近大きな経験をしました。７月初め、私はそれまでの総務省から福井県庁に異動となりました。４度目の嬉しい地方勤務です。しかし、母校での講演から戻った直後の７月18日には福井豪雨災害が、８月９日には美浜原発事故が立て続けに発生して状況は一変しました。

同窓生便り

私は、災害・事故の発生と同時にこの大きな渦に巻き込まれ、被災地を訪れたり、連日連夜開かれる２つの対策本部に出席して、知事などとともに災害の対応に追われてきました。

豪雨災害では、緊急消防援助隊・自衛隊・警察への出動要請や連絡調整、人命救助、電気・ガス・電話などのライフラインの確保、水や食糧の供給、通信途絶した地域への救助員の派遣、現地に直接県職員を派遣しての情報収集活動、避難所の開設・運営、錯綜する現地情報を整理・一元化するための記者会見・マスコミ対応、不安に陥る被災住民への情報発信、その後の雨による再度災害を防止するための河川・道路の仮復旧、全国から訪れる多くのボランティアへの対応、交通渋滞対策、住宅からどんどん排出される土砂や家財道具などの仮置き場までの運搬、応急仮設住宅の建設、細田官房長官・井上防災担当大臣・麻生総務大臣を始めとした政府関係者への要請活動、義援金・義援物資への対応、被災者の生活再建のためのお見舞い金の支給、使いにくい国の制度に代わって被災者の立場に立った住宅再建支援のための県単独制度の創設、産業復興のための全国一手厚い補助・融資制度のための予算措置、県議会対策…。

さらに原発事故では、熱傷を負った作業員の病院への搬送、重度患者のための病院・医師の確保、ヘリコプターの手配、放射能汚染がないかの確認、現地への出納長の派遣、関西電力への安全確保の指示、原子力安全・保安院との連絡調整、中川経済産業大臣への要請、原因究明のための独自調査、二度とこうした事故が起こらないようにするために原子力発電所の運転を休止しての再度の点検を求める指示、観光面などでの風評被害対策などなど。

いずれの事態の際にも、緊迫した状況の中で次々ともたらされる断片的な情報をもとに、今被災者が求めているものは何か、被災地に必要なことは何かを第一に考え、対策を打っていきました。そして今も、寸断された鉄道の復旧、ゴミや土砂の最終処分、入院患者への最適な治療方法の確保、もともと苦しい財政運営の中での適切な財源確保、補正予算の編成、原子力発電所を運転再開するために必要な安全が確保されているかの確認などを引き続き行っています。

一方で、今回の災害では想像もしなかったほどの暖かい心にもふれました。大きく報道された２億円の宝くじ当たり券のご寄付を始めとした多くの義援金、６万人を超える一般ボランティアに２万人を超える学生・生徒のボランティア、さらに１万５千人を超える県職員・市町村職員・教職員が仕事とは別に被災地に入ってボランティア活動をするなど、沢山の人たちの思いやりの輪が広がっており、行政の仕事をしながらも多くを教えられ、本当に嬉しく思っています。

この２ヶ月、母校での講演と大きな災害・事故を契機として、これまでにない経験を数多く積ませていただきました。自分の子どものような世代の生徒達に教えられ、豪雨災害・原発事故から多くのことを学びました。これからも災害対策はまだまだ続きますが、今回の経験を、母校のために、またこれからの仕事の面で活かせていければと思っています。

9.11テロに遭遇して

総務省情報流通高度化推進室長 **阿知波 吉信**（22回生）

ちょうど前回の米国大統領選挙真っ盛りの頃、財団法人国際通信経済研究所ワシントン事務所に出向し、２年を過ごした。任務は、新たに打ち出されるであろうIT政策や対日要求事項を可能な限り事前に把握し、その背後にある推進勢力や目的を分析することで、場合によっては、具体化される前に解決を図るといったことである。

着任後１年余りを経たころ、生活を一変する事件が起きた。９月11日のテロである。ポトマック川対岸のペンタゴンに飛行機が突っ込み、国務省に対する自動車爆弾テロ（のち誤報と判明）やワシントンに向かう未確認飛行機８機などから、攻撃続行中との報道が行われた。この頃から、自宅に避難する車で、ワシントンは空前の大渋滞となった。もちろん私も必死に逃げまとった一人である。しかし、不思議とパニックは起きていなかった。信号のない交差点では、そこに到着した順番で通過するという日常のマナーが守られていた。我先にという行動は、見受けられない。車中のラジオからは、核攻撃の可能性までもが言及されていたのだが。これが日本だったら、多治見だったら・・・。

さらに驚くべき事に、テロ発生に対する責任追及の声は、アメリカの団結を呼びかける声の前に沈黙したことだ。CIAやFBIに対する責任はもとより、救援中の二次災害で、多くの消防士や警察官が命を落としたが、これに対する責任追求も後回しにされた。つまり、「まず敵を倒す」という目的が最優先にされたわけだ。人々は、復旧作業に奔走する人々をヒーローであると讃え、ハロウィンでは、子供たちの間で消防士に変装することが流行となった。このように米国では、人々のために貢献した人々をヒーローと、成功した人々をアメリカンドリームと皆が讃え合う。未知の事態に遭遇した場合も試行錯誤を繰り返しながら、少しだけでも前進していこうとする。

こうして自由な国アメリカの行動規範を考える時、自主性と自己責任性の原則を忘れるわけには行かないが、その精神は社会建設の場にも反映されている。例えば、バリアフリー。ワシントンでは、電動車イスで、郊外から都心まで、一人で通勤する身障者が日常の姿となっている。地下鉄を例に取れば、地上からホームまでエレベーターが設置され、ホームと電車のドアの高さが揃い、車イスでの乗降が円滑にできるように設計されている。他人に頼ることなく自立を可能にし、各人の能力を発揮させることを指向したインフラ整備が推進されているのだ。日本ではどうだろうか。少子化が進む日本で、ベビーカーの使用時に不便はないだろうか。ちなみに帰国した際、成田空港から東京駅、名古屋駅を経由しながら、実家のある駄知に帰るまでに、最もバリアフリーが整備されていたのは土岐市駅（エレベーター、スロープの整備、トイレはノーチェック）であった。これは、特筆に値しよう。そして、最後に、北校の校訓「自主、自律、自学」が、世界に誇り得る精神であることを、何よりも力説しておきたい。

同窓会便り

「なんじゃもんじゃ」花見行

富田 貴代子（１回生）

去る５月、恵那「なんじゃもんじゃ」花見行に参加しました。15日夕、恵那峡グランドホテルに16名集合。ホテルの食事を楽しみつつ、久しぶりの再会とあってたちまち意気投合。会話に花が咲きました。カラオケも加わり、加藤武教さんの名司会に乗って馴染みの曲が次から次へと飛び出し、一段と盛り上がりました。この日まで触れることのなかったあの人この人の意外な才能が溢れ出し、予定の時間もオーバー気味で仲居さんをはらはらさせた様。各部屋に戻っても、まだまだ話は尽きることなく続きました。

翌16日は８名が加わり、総勢24名。レトロなボンネットバス“トコトコぽんちゃん号”に乗り、天然記念物「なんじゃもんじゃ」（ヒトツバタゴ）の花見行です。生憎朝から雨降り。緑濃き恵那の里は雨に煙って、まるで墨絵の如き趣でこれまた感動。バスの窓

から丁度見頃のなんじゃもんじゃ。真っ白な花々が雪のよう、木が見えるたびに一斉に拍手が起こり、何度拍手したことやら。ドライバーさん、ガイドさんもご満悦。

同窓１回生ということで、おじいさんおばあさんの集団かと思われていたようですが、気分はまだまだ青いお兄さんお姉さんの私たちでした。大いにはしゃぎ、更に旧交を温め合った花見行でした。

満開の「なんじゃもんじゃ」をバックに

7回生の東京同窓会

伊東 正孝（7回生）

何年ぶりかで７回生（昭和42年卒業組）同期の東京での集まりを開くことができた。６月はじめの週末、日射しが強く梅雨入りはもう少し先と思わせるような日の昼下がり、都内某所の寿司屋に定刻前には皆集まった。以前ならば必ず遅れてくる人がいたものだが、各々時間にゆとりが出来てきたのかもしれない。

７回生は、現在関東一円に約50名居るが、今回の参加者は東京周辺在住者を中心に結局14名（うち同級生御夫婦２組）となった。何せ大方は久しぶりの再会であり、なかには高校卒業以来はじめてという友もいる等、さすがに長い歳月を経て、当時の面差しがすぐにはお互い思い浮かばない。勿論、3名参加の女性陣はは、各々あまり昔と変わらないのですぐわかった……。しかし、若干の戸惑いもはじめのうちだけで、乾杯する頃にはあちこちで東濃弁まじりの思い出話に花が咲き、酒と話が進むにつれて気分は40年近い過去に戻っていける。年代と体験を同じくする同期ならばこそであり、全体の同窓会とは別にこういう気兼ねのない小さな集まりもたまには良い。

各自の近況報告は、この年にもなるとそれこそ「人生いろいろ」であり、宮仕え・自営・悠々自適、子育て完了・進行中、趣味等々多様多彩。どうしたものか孫の話は出なかったようだが、ともかく皆健康第一に、人生の折り返しに差しかかりつつあるといったところ。

7回生の面々

久しぶりの友との語らいは何時までも尽きないものの、時間はたちまち過ぎて余韻を残しつつの散会となった。それだけに、このまま別れ難いという思いから、多くが二次会へと流れこみ、夜の更けるまで青春の頃の歌を熱唱することとなった。

懐かしくも充実したこの集まり、次回いつになるか分からぬが、より多くの参加で、より賑やかに楽しくやりたいものである。

第７回BA@YOKOHAMA開催のご報告

岩田 敬子（７回生）

春爛漫の４月16日、第7回横浜地域交流会「BA@YOKOHAMA」が、1年ぶりに、横浜みなとみらいのクイーンズタワーにあるパブレストランで行われました。埼玉からの同窓会東京支部会長愛知さんをはじめ、川崎、横須賀、大磯、鎌倉など、横浜及びその近郊都市からの参加者が12名（うち、女性は４名）、和気藹々、自己紹介や情報交換など、盛沢山のお料理をいただきながら、大いに楽しみました。いつお会いしても、同窓生の皆さんには親しみと懐かしさを覚えます。心地よい酔いの中、みんなで生ビールのジョッキを掲げ、何度も乾杯しました。この交流会のご案内は、E-メールやFAXで適宜お送りするほか、同窓会東京支部のホームページでもご覧になれます。案内をご覧になった方は、地域にこだわることなく、どなたでも、自由にご参加ください。お会いできるのを楽しみにしています。なお、開催案内をE-メールで送信して欲しい方は、下記までご連絡下さい。

Hideochi@aol.com（大地）　tre33@kamakuranet.ne.jp（岩田）

第１回埼玉地区交流会

畑中 清一（９回生）

去る６月27日（日）に、このところ発展著しい「埼玉新都心」のとあるレストランで、第１回の「埼玉地区交流会（仮称）」が開催されました。たまたま同窓会東京支部の愛知会長がさいたま市にお住まいということもあって、神奈川地区に続いて埼玉地区でも地域交流会をスタートさせようということとなり、先ずは少人数で開催し徐々に輪を広げていこうとの方針のもと、有志が連絡を取りあった結果、１回生から13回生まで、神奈川地区からの特別参加者2名を含め、合計10名の方が参加されました。

昼食をともにしながら12時から約3時間、多くの参加者がお互い

同窓会便り

に初対面で、年齢もまちまちであったにもかかわらず、同じ埼玉に住む同窓生ということからか、各自の自己紹介・近況報告を取っ掛かりにして仕事・趣味の話から東濃地方の話題、さらには国際情勢まで、大いに話がはずみ盛り上がり、あっという間の３時間でした。

同窓会名簿によれば、埼玉地区在住者は約150名に上り、今後少しずつでもいいから自然体で輪を広げていき、次は来年３月頃に第２回を開催することを申し合わせてお開きとなりました。

丸山芳樹君急逝の報に接して

原田英明（12回生）

丸山芳樹君（12回生）が急逝したとの報を受けて、７月16日、12回生が10人ほど集まって飲み会を開きました。社会人になってからの彼を知る者はほとんど居ないものの、高校時代のエピソードなどを語り合い偲びました。同期の人の突然の事故死には、皆衝撃を受けた模様で、人生を考えるひとときでした。

丁度この日に、丸山君の実家に焼香に行った稲川直樹君から以下のような報告を頂きましたので、詳報に代えて紹介します。

「（略）事故は６月25日午前４時半ごろ、横浜市栄区の自宅から早朝サイクリングで茅ヶ崎方面をまわり国道134号で鎌倉に入ったあたりの片側２車線の上り坂で起こった。運転手によればトラックの後輪付近に接触したとのこと。救急病院に運ばれ集中治療を受けたが、本人に意識が無く身元確認に手間取り、横浜の家族に電話があったのは９時半ごろだった。

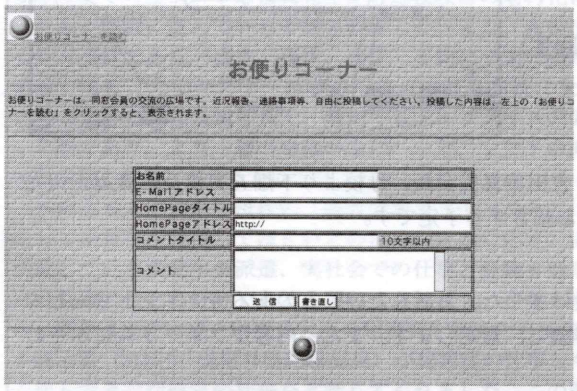
そのときの説明では初期治療の結果、命は取りとめたとのことだったが、急変して12時半ごろ死亡した。司法解剖の結果、頭部以外に脚に１カ所骨折があるほか大きな傷はなし。頭部が致命傷だった。ヘルメットは付けていなかった。

警察の現場検証によれば、後輪ではなく車両前部左に接触したらしい。お母さんは、広い通りでもあり、居眠りかよそ見運転が原因ではなかったか、また事故から初期治療、連絡までの経過に不明な点が多いと、大変悔やんで落胆しておられました。時刻が早いため今のところ目撃者は確認されていない。

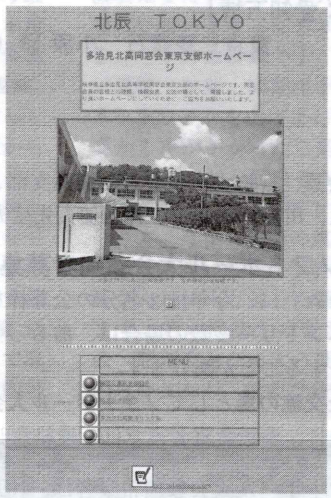
国際協力事業団の緒方貞子直属の今の部署で３年になり、最近ではイラクに派遣されるかもしれないと心配していたそうです。本が好きで大学の先生になりたいという気持ちは続いていた。10年ほど前に小沢一郎から政治をやらないかと誘われたが断った、また岡田民主党代表とは通産省の１年違いでよく知っている、と話して、政治家になる気はなかったらしい。（略）」

12回生の面々

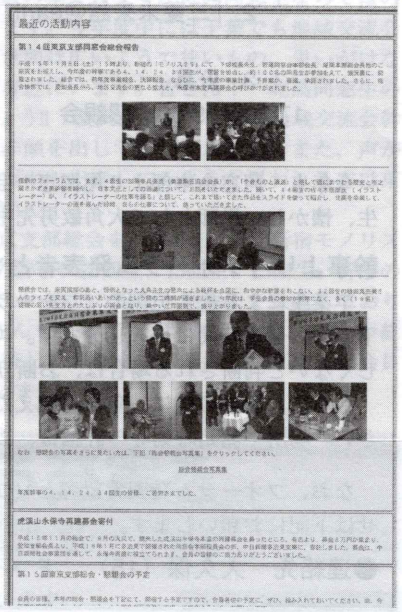
「同窓会東京支部ホームページ」にアクセスしてみてください



◀画像3



▲画像1　　画像2▶



多治見北高同窓会東京支部ホームページ（画像１参照）は、東京地区在住の同窓生を主たる対象として、同窓会活動状況のみならず、母校の最新状況、同窓生の近況等を、伝達するために、平成12年から、立ち上げ、既に、４年経過しております。ホームページの作成、維持管理に関しては、東京支部会員の無償ボランテイアで、運営しております。当初は、画像も無く、文章、イラストのみで、無味乾燥な内容でしたが、最近では、同窓会総会の内容（画像２参照）等、写真を多用し、一目見ていただけるだけで、活動状況が、理解していただけるように、充実してきております。さらに、この４月から、同窓生の近況等を掲載する「お便りコーナ」（掲示板）に、同窓会本部の広報委員である18回生の坂本さんから、タイムリーに、岐阜県、東濃地区の地域情報の提供をいただけるようになり、ますます、興味深い内容になってきております。

ただ、残念なことに、一般の同窓生からのアクセス、投稿が非常に少なく、折角の場が、十分に生かしきれているとは、いえません。

同窓生の皆さん、是非、ホームページをアクセスし、「お便りコーナ」に、投稿者本人の近況、年次ごとの同窓会案内、田舎のトピックス等、積極的に、投稿し、同窓生の輪をひろげていこうではありませんか。

＜投稿方法＞

下記手順ですので、是非、一度、身近な情報を投稿してみては、いかがですか。ただし、公序良俗に反する内容は、ホームページ管理者にて、削除いたしますので、ご了解ください。

①同窓会東京支部ホームページ（http://members.aol.com/takitatky/）に、アクセスし、最初のページから、「お便りコーナ」にジャンプ。

②「お便りコーナ」の投稿フォーマット（画像３）に、投稿内容を入力し、送信ボタンを押下してください。これで、投稿作業は、完了です。まもなく、自動的に、投稿内容が、ホームページの「お便りコーナ」に反映されますので、確認できます。

＜「お便りコーナ」の見方＞

「お便りコーナを読む」ボタン（画面左上）を押下すると、「お便りコーナ」の投稿内容が、表示され、確認できます。ただし、掲示順が、投稿順になっているので、最新投稿は、一番最後に、掲示されます。

第15回東京支部総会・懇親会のご案内

初秋の候、会員の皆様には益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。本年も東京支部総会・懇親会を下記要領で開催することになりました。今年度は、いかに多くの方々に参加いただけるか工夫し、社会人の方の懇親会費を半額にするなど、新しい試みに積極的に取り組んでいます。この努力を評価して多くの方が来て下さり、今年は新しい出会いがたくさん生まれることを願っています。たまたま同じ学校で学んだというだけの縁が、新しい出会いを作るなんて、すてきなことだと思いせんか。

ご多用中のこととは存じますが、同期の方々とお誘い合わせのうえ、是非ご出席くださいますよう、ご案内申し上げます。

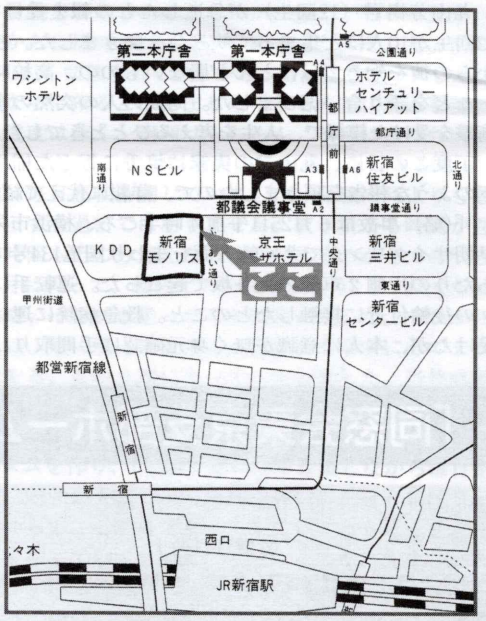
なお、総会・懇親会の出欠のお返事は、葉書が10月31日までに届くようにご投函下さい。

多治見北高同窓会東京支部総会・懇親会実行委員会
（5、15、25、35回生）幹事代表　大久保幾久美（15回生）

記

日時　平成16年11月13日（土曜日）　午後4時～7時00分（3時30分開場）
会場　モノリス29（東京都福利厚生事業団施設）
新宿区西新宿２-３-１ モノリスビル29F　TEL 03（5381）9229

懇親会費　一般　3,500円　学生　2,000円（新卒業生は1,000円）
年会費　一般　3,000円　学生　1,000円



プログラム

16:00～16:40　総会（議長選出、活動報告、会計報告、その他）
16:40～17:30　フォーラム
1.「とうのう演劇プロジェクト」
オイディプス事務局　大久保 幾久美（15回生）
2.「三菱未来館@earth：愛知万博」
東京三菱銀行　小原 伊（15回生）
3. 公募
17:30～19:00　懇親会

今年も、同窓会本部より尾関恵一会長、宮地正治副会長、関西支部より吉田美喜夫会長、母校より下畑五夫校長と渡辺正司先生、懐かしい恩師として大角敏男先生、川合孝哉先生、林田加夫先生方をお招きする予定です。

幹事より『フォーラム発表者とソフトボール大会参加者募集!』

卒業生による総会恒例の「フォーラム」に、今年は２名分の公募枠を設けました。お話したいことのある方、エントリーして下さい。発表時間は一人10分です。エントリー多数の場合は、前もって審議し、選定します。また、内容がフォーラムにふさわしくないと判断される場合は、お断りすることがあります。

さらに、総会の前に、年次を越えた交流の場としてソフトボール大会を企画しました。日頃運動不足の方等、奮ってご参加下さい。場所や開始時刻等の詳細は、後日、参加希望者宛てにご連絡致します。

なお、フォーラム発表希望者とソフトボール大会参加希望者は、10月20日までに返信用葉書をお出しください。詳細問い合わせは下記にお願いします。

●連絡先　大久保（15）　Eメール：okuboikumi@nifty.com　電話：0426-24-9848　FAX：0426-24-9864

編集後記

「北辰」18号をお届けします。多くの原稿が寄せられ、いささか窮屈な紙面になりました。文字も小さくなってしまいました。年に一度の発行で、近況といってもニュースとしての新鮮さを求めることはできません。しかしあわただしい毎日ですから、このくらいのゆったりしたペースのものがあっても良いのかも。いろんなところで、小さな規模の集まりが持たれているようで、そうしたことの集積が年に一度の総会・懇親会につながればと思います。会報の編集で心掛けていることは「バランス」です。同窓生の「親睦」を旨とするのが同窓会。参加者の価値観は多様で温度差もありますから、必要以上の意味付与は危険です。したがって会報の内容もなるべく押しつけがましいものにならないようにと思うのです。だからといって、薄っぺらで表層的な内容ばかりでは物足りなくなってしまうかも知れませんが・・・（原田）

編集委員（連絡先）
〒338-0001　埼玉県さいたま市上落合2-11-7 2107　愛知紘治（１回生）TEL/FAX 048-855-7840
〒247-0062　神奈川県鎌倉市山ノ内67　岩田　実（７回生）TEL/FAX 0467-25-5329
〒131-0043　東京都墨田区立花6-8-1-304　原田英明（12回生）TEL 03-3616-5398　md-harada@axel.ocn.ne.jp
＜ホームページアドレス＞http://members.aol.com/takitatky/　＜メールアドレス＞takitatky@aol.com